

# 勝手なギリシャ文字翻字(2007年12月24日版)

辻野 匠/TuZino, Taqumi

ταΑκμια τουΖηνος

## 1 はじめに

ギリシャ文字をラテン文字に翻字するというのはローマ時代からある。では、逆はどうなのだろうか？ 現代ギリシャ語では、現在のギリシャ語の音韻にもとづいて英語や欧州の言葉をギリシャ文字で翻字してゐる。ギリシャ語圏では、なんでもギリシャ文字で表現するわけだ。日本人は仮名、漢字にアルファベット、ギリシャ文字といくつもの文字を使ひわけてゐるので、これは理解しがたいかもしれないが、欧州ではある文化が使用する文字は一種類しかない。ラテン文字圏はラテン文字しか使はないし、キリル文字圏ではキリル文字しか使はない。

現代の事情はわかった。しかし、現代のギリシャ語の音韻は西洋古典で倣った古典的音韻とずいぶん隔たりがある(例、βは古典では [b] だが現代は [v], δは古典では [d] だが現代では [dh]=the の子音である)。これに従って翻字すると、西洋諸語に存在する膨大な数の古典ギリシャ語からの借入語の翻字に破綻を来す心配がある。ここでは、B=βのように、古典風の翻字を考えたい。

## 2 ラテン文字の翻字

A	B	C	D	E	F	G	Ğ	H	I	J	Ĵ	K	L	M	N
a	β	(C)	δ	ε	(F)	γ	γ	χ	ι	ι	ι	κ	λ	μ	ν
A	B	(C)	Δ	E	(F)	Γ	Γ	X	I	Ī	Ī	K	Λ	M	N
O	P	Q	R	S	Š	T	U	V	W	X	Y	Z	Th	Ph	Ps
o	π	(Q)	ρ	σ	σ	τ	v	υ	υ	ξ	υ	ζ	θ	φ	ψ
O	Π	(Q)	P	Σ	Σ	T	Υ	Υ	Υ	X	Υ	Z	Θ	Φ	Ψ

注意

Ğ, ğ soft g. (E) giant の g. (F) Gitanes の g

Ĵ, ĵ (E) joke の j, (F) Bonjour の j.

Š, š (E) sheet の sh, (F) marché の ch, (D) Englisch の sch

正確にはフランス語 Bonjour の j は英語 pleasure の s と同じで、yogh(有声後部歯茎摩擦音). 英語の j は d-yogh(有声後部歯茎破擦音) で仏語とは異なるが、ここでは厳密には考えない. j の字を翻字したいが、半母音(ヤ行の子音)ではないことを示したい時に用いる. 同じことは g にも云へる. 仏語の soft g と英語の soft g はそれぞれの言語の j を同じ音をもって

また、帯気母音の h は ‘ で示す. たとえば ‘ελληνη.

この翻字表を見てわかるように、もっとも混乱しているのは Y である. Y は重複して使われているが、これは Y はローマ字の U, V, W, Y の元になっているためである. 同じ起源というわけだ. これの事情(歴史)はおもしろいので後で簡単に述べる. 翻字としては字音符で辨别することにした. ギリシャ文字の場合、アクセント記号が字の上に乗るので、字音符は必然的に字の下に配置される(V の *υ* は例外. これはアクセントのない U という意味を子音という意味に曲解して V ということにしているため. 後述).

小文字の *υ* は u に似ている. U は *υ* の最初のローマ字といえる. *υ* の発音は古典期以前は [u] でローマ字と同じだったが、古典期になると [y](Hütte ヒュッテの *ü*) の音に変化した. [u] の音はフランス語のように *ou* として表現する(ただし、*ou* は語によっては [ou] や [o:] とも発音された). ラテン語では古典期以前に字を西ギリシャ人からもらったので、ローマ字では u は [u] だがギリシャ語では [y](*ü*) と不一致がある. ここでは簡単のため *υ* は [u] とする.

大文字の Y は Y に似ている. ローマ人がギリシャを征服し文化や技術を接収する時に大量のギリシャ語をローマ人にながれ込んできた. ローマ人がラテン文字で翻字した際に、ギリシャ語の Y とローマ字の U が音価が異なっていることに気がつき、この違いを表現するために Y という字を) 輸入したためである. したがって、Y は Y の再輸入品といへる. Y と Y のこまかい違いは字体の相異である. ここでは、下書きの *iota* 風に *υ* の下に、重アクセント (grave) を配置することで表現した (Υ, *υ*). 下書きの *iota* を適用するなら、Υ, *υ* となる.

V は U の最初の派生物である. ローマ時代、U は母音にも子音にも使はれてきた. UENUS と書いて、ウェーヌスと読む. 英語のヴィーナス(美の神、金星)である. 最初の U は [w] の発音を担う子音である. 日本語で云へばワ行頭子音である. 二番目の U は純然たる母音の U「ウ」である. このように同じ文字を母音にも子音にも使っていたから、時々混乱がおきることがあった(同じ事情が I にもあった). F はギリシャ語ではワウといって [w] の音価をもっていたので、F を反対にしてみたり(F そのままだとラテン語の F[f] になってしまうから) といろいろ試みられたが、最終的な解決は中世になって子音を V、母音を U と書きわけてからである. その後、V は [w] から [v] に音価が変わってしまった. 一方の W は主にゲルマン人の間で、[w] の音を示すために別途発明されたものである. ゲルマン語では逆に、V の音価が [v] ではなく、[v] の無声音の [f] に弱化してしまい、W[w] の方が [v] に強まってしまった. したがって Volks Wagen はヴォルクス・ワーゲンではなく、フォルクス・ヴァーゲンなのである. このように V と W の音価は言語それぞれである. ここでは *υ* で表

現した。重アクセントはアクセントが失われたという意味で、これを「母音ではなくなった」という風に曲解した。ÿのように短音記号で表現してもよいだらう(同じことはJにも云へる)。WとVは上述のようにややこしい経緯と音価をもっているので翻字しにくい。翻字しわける場合は、より摩擦の大きいV[v]をÿとして表現する。

もう読者は、次のような字を見ても驚かないだらう。

y, ÿ, ÿ, y

yはuなのだから。

### 3 日本式ローマ字の翻字

√ 直音(開口呼)で清音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/v	エ/e/ε	オ/o/o
ア行/'/	あ α	い ι	う υ	え ε	お o
カ行/k/κ	か κα	き κι	く κυ	け κε	こ κo
サ行/s/σ	さ σα	し σι	す συ	せ σε	そ σο
タ行/t/τ	た τα	ち τι	つ τυ	て τε	と τo
ナ行/n/ν	な να	に νι	ぬ νυ	ね νε	の νο
ハ行/h/χ	は χα	ひ χι	ふ χυ	へ χε	ほ χo
マ行/m/μ	ま μα	み μι	む μυ	め με	も μo
ヤ行/'/	や îα	-	ゆ îυ	(イエ) îε	よ îo
ÿ	や ÿα	-	ゆ ÿυ	(イエ) ÿε	よ ÿo
ラ行/r/ρ	ら ρα	り ρι	る ρυ	れ ρε	ろ ρo
ワ行/'/	わ ûα	ゐ ûι	-	ゑ ûε	を ûo
ÿ	わ ÿα	ゐ ÿι	-	ゑ ÿε	を ÿo

√ 直音(開口呼)で濁音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/v	エ/e/ε	オ/o/o
ガ行/g/γ	が γα	ぎ γι	ぐ γυ	げ γε	ご γo
ザ行/z/ζ	ざ ζα	じ ζι	ず ζυ	ぜ ζε	ぞ ζo
ダ行/d/δ	だ δα	ぢ δι	づ δυ	で δε	ど δo
バ行/b/β	ば βα	び βι	ぶ βυ	べ βε	ぼ βo
パ行/p/π	ぱ πα	ぴ πι	ぷ πυ	ぺ πε	ぽ πo

√ 開拗音(一部)

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/υ	エ/e/ε	オ/o/o
カ行/k/κ	きゃ κi $\hat{\alpha}$	(き κi)	きゅ κi $\hat{\upsilon}$	きえ κi $\hat{\epsilon}$	きよ κi $\hat{o}$
サ行/s/σ	しゃ σi $\hat{\alpha}$	(し σi)	しゅ σi $\hat{\upsilon}$	しえ σi $\hat{\epsilon}$	しよ σi $\hat{o}$
タ行/t/τ	ちゃ τi $\hat{\alpha}$	(ち τi)	ちゅ τi $\hat{\upsilon}$	ちえ τi $\hat{\epsilon}$	ちよ τi $\hat{o}$
ガ行/g/γ	ぎゃ γi $\hat{\alpha}$	(ぎ γi)	ぎゅ γi $\hat{\upsilon}$	ぎえ γi $\hat{\epsilon}$	ぎよ γi $\hat{o}$
ザ行/z/ζ	じゃ ζi $\hat{\alpha}$	(じ ζi)	じゅ ζi $\hat{\upsilon}$	じえ ζi $\hat{\epsilon}$	じよ ζi $\hat{o}$
ダ行/d/δ	ぢゃ δi $\hat{\alpha}$	(ぢ δi)	ぢゅ δi $\hat{\upsilon}$	ぢえ δi $\hat{\epsilon}$	ぢよ δi $\hat{o}$

ヤ行ワ行や開拗音・合拗音は、 $\hat{\upsilon}$ 「ユ」や $\hat{\iota}$ 「キ」のような tie bar(widehat) で表現した。これは日本語として二つの母音で一母音をなしてゐることを表現したものである。もちろん、ラテン文字翻字表で示したように、 $\hat{\iota}$  や $\hat{\upsilon}$ としてもよい。この方法は、ギリシャ語が書けるフォント等の計算機環境なら標準で対応している。もし計算機環境は許すのであれば、 $\hat{\iota}$  や $\hat{\upsilon}$ としてもよいが、 $\hat{\iota}$ ができる環境なら、 $\hat{\upsilon}$ も可能だらう。こちらのほうがより日本語の音韻には適っている。

ヘボン式風にしたい場合は、ツを  $T\sigma\upsilon$ 、フを  $\Phi\upsilon$  のようにできるが、シ (shi) やチ (chi)、ジ (ji) は表現が難しい。ギリシャ語は硬口蓋化、あるいは軟音化がほとんどない言語であつて、文字にもそれが反映されており、硬口蓋化した音をうまく表現できない。現代語でやば  $\Gamma\alpha$  であるから ( $\Gamma\iota$  で [j] になる。ちなみに、ギは  $\Gamma\kappa\iota$  と書く)、シを  $\Sigma\gamma\iota$  としてもいいが、あまりしっくり来ているようには思へない。むしろ sh を S の帯気音として  $\Sigma\iota$  とするほうが本来の表現に近いかもしれない。ジは同じように  $Z\iota$  となる。問題はチである。ギリシャ語ではチの音を表現するのは難しい。S のように T の帯気音というと  $\theta$ (th) になってしまうし、C+H と考えて K の帯気音というと  $\chi$ (ch,kh) になってしまう。ローマ字圏では C[k] が硬口蓋化を起こして t-esh(church のチ) や esh(chanson のシャ) になったのに対して、ギリシャ語ではまったくそのようなことは起きなかったため、C のような便利な (というか言語によって読みかたが異なっており解釈困難な) 文字がないのである。チをあえて表現するなら、t-esh の精神に基づいて  $T\sigma\iota$ (tshi) が妥当だらう。もし、前述のラテン文字翻字表に従うなら、 $T\sigma\iota$  となる。ヘボン式のジは翻字表に基づけば、 $\hat{\iota}$  であるが、 $\Sigma$  のアイディアに従うならはジは  $Z\iota$ (または  $\Delta\zeta\iota$ ) となるだらう。 $Z$  は翻字表では触れなかったが、それは  $\check{g}, \check{j}, \check{z}$  は同じ音価に収斂してしまっているため、翻字のため必要なら導入してもよいだらう (たとえばキリル文字の Ж/英語圏では zh として翻字される/)。